パネルディスカッション

「日本におけるリベラル・アーツ教育の国際的な質保証」

中嶋嶺雄・国際教養大学理事長/学長

Richard A. Gardner・上智大学比較文化学部長

木畑洋一・東京大学教養学部長

内田勝一・早稲田大学国際教養学部長

M. William Steele・国際基督教大学教養学部長

立川明・国際基督教大学教授（司会）

司会：　定刻がまいりましたのでパネルディスカッションの部に入りたいと思います。本日司会をさせていただきます国際基督教大学の立川明と申します。今現在、規模の差こそあれ日本で教養教育を実践されているところは、かなりの数あるのではないかと思っています。本パネルディスカッションは「日本におけるリベラルアーツ教育の国際的な質保証」を主題として掲げております。また先ほど本学学部長の話の中にも出た「現代の問題に臆せず大胆に向かってゆく」という点からも、本日パネラーとしてお呼びした方がおいでの大学や学部プログラムはおそらくその代表格にあたるのではないかと思います。本日は、パネラー各位から、各大学における教養教育の試みについて、目的と特色、あるいはめざす到達点と、そこに至る困難（未来形でも）とその克服の方法につきお話を伺い、そのあとグループで活発な討論を期待したいと思っております。本ディスカッションは全体として大きく二つに分ける予定でおります。前半では４名のパネリストの方々に事実に関する質疑を含めてそれぞれおよそお一人１５分の時間でご報告をいただきたいと思っております。従って質問の数はご報告の長さに応じて、私のほうで勝手ですが調節をさせていただきます。そして後半では、いただきましたご報告をふまえて、フロアの方々の積極的な参加をお願いいたします。自由に、自由ゆえの深い議論、質疑、意見の交換を行っていけたらと思っています。

それでは、先ほどすでに森本副学長からパネリストのお名前だけは紹介がありましたけれども簡単に紹介をさせていただきます。（紹介省略）

それではプログラムの順番に従いまして中嶋嶺雄先生から御発題をいただきたいと思います。

――――リベラルアーツを身につけることが国際教養大学(AIU)の大学の資格である

中島：　教養教育について話す機会をいただき光栄に思っております。ICU はあらゆる点で日本の教養教育の先陣を切ってこられましたし、1950 年代の半ば、私自身の大学受験の時に ICU というのはどういう大学なのかと、資料を取り寄せた記憶がございます。あれから半世紀たち、ICU がやってこられたことの成果はそこかしこに表れていると思います。

本日は大きく分けて２つの話をさせていただきます。１つは、なぜ今、学部段階で教養教育が必要か、なぜ重視されているかということなのですが、これは一方では日本政府、つまり文部省(現文部科学省)の高等教育政策にも大きな責任があると思います。いわゆる我が国の大学設置基準の大綱化というものが 1990 年代の初めにかけて行われまして、言ってみれば教養教育が解体したんですね。教養部あるいは教養学部というものが東京大学を除いてほとんど無くなりました。その前後に大学院重点化という政策が重なりまして、日本のいわば高等教育でのいい意味での伝統が破壊されたんだと思います。私自身もつい最近、中教審の委員として大学院部会長として、じゃあ大学院はどうなのか?日本の大学は大学院にふさわしい教育をやっているだろうか?という反省から大学院教育の実質化の答申を出したばかりなのですが。実は、欧米のトップの大学院に比べて教育のプロセスが非常に安易だというんですね。ですから両面から、高等教育は非常に大きな危機にある。言い換えれば大学院を重視すればするほど、実は学部における教養教育というのが重要になってくるということなのです。

こういう中で最近、教養教育についての中教審からの報告も出てはいますが、それはあくまでも一般論です。今日皆さんと議論したいのは、もっと具体的なことです。たとえば国際教養大学の場合はカリキュラムそのものに則した根本的な教養教育のあり方や、それから教養教育の一環として非常に重要な外国語教育についての従来からの反省や一種の危機感などがあって、それを前提に、小さな試みを進めているところです。

あえて国際教養という名前を、大学の名前にもつけました。私もさんざん悩み、夜遅くまで書いたり消したりしていたことを思い出すのですが、英語ではインターナショナル・リベラルアーツなんですね。学部名もインターナショナ

ル・リベラルアーツです。先ほど上智大学の学部名を伺いましたらファカルティー・オブ・リベラルアーツだということで、インターナショナル・リベラルアーツという言葉は英語としてはたぶんおかしいのだと思います。しかしあえて名付けたのにはそれなりの理由と定義がありまして、日本には国立大学が89、公立大学が最近増えて77、計166の国公立大学があるのですが、全て地名もしくは地域名を大学の名前に冠しているんですね。しかし我々は大学の新しい特徴を大学の名前に冠しようという試みをしたわけです。ではインターナショナル・リベラルアーツにはどういう特徴があるかと言いますと、学ぶ側の外国語のコミュニケーションの能力を高めるということ。まずそれをやろうと。第一のハードルです。

第二のハードルがベーシック・スタディーズ、基盤教育をきちんとやること。基盤教育の中にはもちろんヒューマニティーズもありますし、ソシアルサイエンスもありますが、化学とか物理とか統計学、数学などもあります。それからもう一つ誇りにしていることはアーツをやることですね。たとえば芸術論では音楽と演奏と、それから芸術理論。渡辺玲子さんのような世界的なバイオリニストが実際にヴィヴァルディからブラームスあたりまで弾きながら、教えてくれる。非常にいい雰囲気で、夕暮れどきに十数人にバイオリンの演奏を聴きながらヴィヴァルディの四季の「春」ではどうしてあそこを急に春雷の響きにしたのか、楽譜を見て分析するといった光景がみられます。それから美術では、若い頃バチカンのシスティナ礼拝堂の研究を行って注目された美術史の方面でトップクラスの国際美術史学会の副会長でもある田中英道さんに来ていただくといった少人数の授業科目を作っております。

それから第三のハードルが、いわゆるグローバルスタディーズとグローバルビジネスのプログラムの中で専門を見つけること。ただこの専門というのはあくまでも教養教育の一環としての専門で、本当の専門はやっぱり大学院でやらないとほとんど役に立たないと思いますね。従って本学としては、学んだ人たちに、もう一歩進んだ高等教育を受けてほしいというのが期待なのですが、なかなか難しい。今、大学の事務官や一部の教官は何より就職のことを気にして、キャリアデザインを早くやれと言うので、実際にやってはいます。インターンシップもほぼ全員が受けましたし。

とはいえ、やはりリベラルアーツをきちんと身に付けることが、うちの大学の資格だと思っています。資格というのはなにもたとえば臨床心理士の資格をと

ることばかりではないというふうに考えておりまして、そこは今後の課題だと思っています。学ぶ側からすると以上三つのハードルをクリアしなければいけないのですが、大学側からの目標は、具体的にはたとえば入学時の TOEFL スコアが平均470くらいであること。全員が留学し、しかも留学先で30単位を履修すること。世界の22の一流大学と協定を結んでいますし、来週には新たに南京大学が加わる予定です。必然的に条件付けも厳しくなりますから、送り出す時の条件として GPA3.0、TOEFL のスコア 550(PBT)を課しています。最低でも 550点はないと、実際に授業を聴いて良い成績でクレジットを取ってくるということはできないと思います。この間もスコア 547 点の学生をどうするかと議論したのですが、不足が3点だけであっても、条件は条件であるから、1セメスター遅らせてもいいから550点をクリアしたら送り出そうということになりました。結果、約30名が留学を認められました。さらに卒業時の TOEFL の期待値は600点。でなければ実際に英語を使っての仕事はできない。それも今後の課題にしております。そのために図書館も24時間開館、1年生には全寮制を適用というふうに、今までの大学ではできなかったような環境を整えております。

それからキャンパスは留学生がいることもあって、非常にマルチカルチュラルな雰囲気です。いうまでもなく、留学生のための日本語教育以外、全ての授業は英語で行っていますし、大学の中の会議も教授会を含め全て英語で行います。そのため教員ばかりでなく、職員にも非常に高い能力が求められます。競争力がそれを高めるわけです。本学では教職員は車の両輪ですから副学長のうち一人は職員サイドから出すといったこともしています。

何よりも、カリキュラム策定には時間を費しました。中教審の答申でも一般に教養教育が大事だといいますが、これを具体的に言い換えれば、結局どういうカリキュラムを作るかということが全てです。これは、ほとんど議論されてこなかった。私どもは特に、インターナショナル・リベラルアーツを掲げておりますのでカリキュラムの国際的な実質性と互換性に大きな関心を置いています。提携先の大学にある科目は、こちらにも備えないと、単位の互換ができない。私はUMAP(University Mobility in Asia and the Pacific)アジア太平洋大学交流機構の国際事務総長をやっていますが、実際に先方に行って単位を30単位取ってきて、しかもそれを各大学が認定するのは、難しいんですね。欧州に比べて、アジアのハンディは大きい。ですから具体的には留学生を送り出す時に学長自らが留学先の全カリキュラムをチェックして、最終的にうちの単位に

当てはまるかどうかをチェックするんです。たとえば北欧のベルゲン大は非常にいい大学なんですが、ノルウェーの地理と歴史の科目があるのに、うちの大学にはない。そうすると、学生がその科目を履修してきた場合に備えて、概説的な地域研究的科目を作るんですね。これは非常に重要な作業だと思っています。

それから先ほども言いましたように学生は語学能力がないと、とにかく単位をとれませんから最低の条件として英語教育はきちんとする。入学したあとしばらくは、これに相当な時間を集中的にかけます。EAP (English for Academic Purposes) という学術目的の英語集中課程なのですが、そこを TOEFL のスコア別に 3 組に分けます。その後も定期的に TOEFL の試験をして、組を分け直す。一方、TOEFL スコアが 600 点くらいの非常に能力が高い学生は、1 と 2 はスキップすることができるので、英語だけに時間を割かれないようにする。この能力別の教育というのは決して差別的な意味ではないし、むしろ学生にやる気を起こさせています。

これらの点で、私どもの大学はまさに今日の ICU が掲げている「責任ある地球市民を育むリベラルアーツ」のために作った大学だと思っておりますし、秋田の田舎 (昨日の雪でここに本当に来られるかどうか心配だったのですが) で、秋田杉に囲まれた場所でグローバルに考える，グローバルに発信することで、おそらく東京ではできない教育ができる、と自負しています。少人数ですから学生定員 100 人ですが、非常に優秀な学生が全国から集まります。90%が県外からですね。2 年目は 130-140 人に増えます。秋季入学もやっていますので秋にも学生は入ってきます。留学していた高校生を迎え入れることは大切ですから、そのための特別選抜試験もあります。こういう形で、リベラルアーツにとにかく徹しようと，その次のステップとしてグローバル・コミュニケーションの大学院、つまり専門職大学院も作ろうと考えていますが、これは 2 年後の課題です。

学生たちには本当に勉強してもらっています。今、平均点では，TOEFL スコアが 1 年生でも 530 くらいいくようになっていますから，ほとんどの学生が 2 年生になると留学できるところまで伸びるということになると思います。グローバル化の時代，英語だけではなくできればアジアの言語もということで、東アジア研究の課程では中国語も勉強できますし、この 4 月からは韓国語、次の年はロシア語，モンゴル語と、モンゴル学もできるようにしたいと思っています。

しかし外語大学をもう一つ作るつもりはありませんので、外大学長時代にできなかった語学教育も、教養教育の一環としてやろうということです。こうしてグローバル化が進めば進むほど、一方では日本人としてのアイデンティティが大事になります。たまたま新渡戸稲造の「武士道」が全学必読文献になっておりまして，しかしこれは英語で書かれましたね。そういうアイデンティティをいかに形成するかということも大切だと考えています。

いずれにしましてもコミュニケーション能力を付けないと国際社会でほとんど活躍できないですね。一歩日本を出れば、英語でコミュニケーションをとる世界ですから、国際社会で存分に活躍できるような人材を作る。口先だけで流暢な英語が喋れるだけではダメで、中身をどう作るか、が大事です。ICU が 50 年後に社会に評価されているように、本学も 50 年後にはかくありたいと身をひきしめてまいります。ICU とは受験生のアンケートをみると併願者が非常に多い大学なんですよ。その意味でもどうかよろしくお願い致します。

司会：　次に上智大学のガードナー先生、お願いします。

———日本と世界を結ぶ国際教養人を育成すること、そして専門馬鹿を作らないこと

ガードナー：　今日のシンポジウムに参加できるのは光栄ですが、こういうところで日本語で発表する機会が普段はないので、用意したものを読ませていただきます。

上智大学のリベラルアーツといえば比較文化学部の歴史と展開、伝統のことですので、今日は比較文化学部の歴史と現状の話になります。新しい国際教養学部の PR では学部の教育目標をこういいます。「国際教養学部では日本と世界を結ぶ国際的教養人を育成し，積極的に国際社会を担う人材を輩出し，世界の総合理解に寄与することを教育目標とする」。たいへんなことのようですが、学部の構成を見れば夢物語ではない。上智大学では，1949 年に国際部が創設されました。最初の学生はまず外国人，特にアメリカ軍の兵士とその家族でした。従って授業は英語でした。その後、当初予想していなかったほど日本人の学生が増えましたが、創設時には日本人の学生のためのプログラムではなかったの

トスペシャリゼーションの理念をもっと生かす形での新しい進学振り分け方式にも結びつくという形になっています。それとの関連でサイエンスリテラシーの話もいいですか？たとえば文系の人間に対してサイエンスリテラシーをどう教育をしていくかということですね。今までも強調して参りましたけれども、この新しいカリキュラムの中でもその点は強調されることになります。たとえば理系の実験、これは今まで文系の学生は受-けられなかったのですが、4 月からは文系の学生が理系の実験の授業を受けようと思えば受けられるようになります。現に学生の時間割などを見ると結構今でも文系の学生で相当の部分で理系の科目をとっているという学生もおります。ただ、それを全体として広げていくというのには大きな課題があると思います。それからライティングセンターの話です。本当は私どもも日本語にもそれを発展させていきたいと思っています。東大教養学部の場合は、1993 年の改革の時に基礎演習というのを作りました。そこでの基本的な目的というのは、自分できちんとしたレポート論文を書く、そのためのリサーチの力を育て、それから書く力を育てるということです。これは現在行われているのですが、現状はなかなか、そういう目的が完全に実現しているとは言いがたいところもあっていろいろな問題を抱えています。そういう場で日本語のライティングを教えていくという位置づけにはなっているわけです。日本語というのは非常に重要だと思います。今日の先生方のお話は英語で授業をされている大学のことでしたが、それが持つ問題というものもあるだろうということを感じておりました。日本語の力の重要性、特に書くということの重要性は非常に大きいと考えています。

ガードナー：　簡単に説明すると日本の大学の、まあこれは上智を例にいたしますと、学科科目があるんですね。全学共通科目と一般教育の区別があります。アメリカのリベラルアーツ大学はそういう区別がないので。上智では最近変わってきましたが、学科の学生じゃなかったらその学科の授業は取れませんでしたし、ほかの学部の授業もとることはできませんでした。同時に、専門バカではありませんが、ドイツ学科に入ったら 90%がドイツ語の授業だったという現実があります。それで一般教育を作ろうじゃないかということになったわけです。比文には学科科目もない。学部科目しかなかった。誰でも取ってもいい。ほかの学生も英語の能力があれば取ってもいい。わざわざいろいろな専門あったでしょう？たとえば社会学は一般教育の授業を作る必要はなかった。ほかの

学部はそのことが分からない。全学共通科目を担当している先生は、比文も一般教育の授業を作って下さいと言うのですが、必要ないと思うし、そのほうがいいと思う。なぜかというと，ある意味で一般教育は、パン教と呼ばれたり、あまり評判が良くない。ちゃんと教養学の形にすれば、わざわざ一般教育の授業は作らなくていいということですね。学生は自然にいろいろな分野の授業をとれる。比文には、自然科学、サイエンスリテラシーとかは無いので、自然科学の分野では一部一般教育の授業を使っています。
もう一つ、比文がずっと悩んでいる問題は、全部の授業を英語でしている、それは嘘ではないけれどもそうではないところもあります。たとえば日本人の学生は日本の高校を卒業したら Japanese placement test をとらなくてもいい。でもその学生もリーディング　&　ライティングとか、Japanese composition 等も日本語で開講されています。日本語で。ただ一番難しく、また悲惨なことは日本語英語もともに中途半端な学生の存在であり、できる限りそれを避ける方策を立てねばなりません。比文の学生は、僕の学部では結構日本語で教えている授業もとっているんです。

中嶋：　非常に重要な質問がたくさん出てますね。たとえば英語で授業をするのですが、ホントは日本人を相手にするのであれば日本語で授業をしたほうがより伝達しやすいのではないかという議論はしょっちゅうあります。しかし我々の大学は小さい実験的な大学ですから、ご案内のように日本には 4 年制だけで 6 百数十の大学があります。しかしこれからの日本の国際社会での役割を考えると、少なくとも英語で議論ができ、英語で十分なコミュニケーションができる人を養わなければいけないという、そういうある種の危機感と要請があって国際教養大学を創ったわけです。その議論はもちろんありますけれども、文句無しに英語力を付けるということを徹底しています。もちろんカリキュラムの中には日本語表現能力を養うようなカリキュラムもありますし、留学生も多いので日本語、日本学などかなりのカリキュラムを入れています。それから日本語表現スキルみたいな授業も 1 年生の時から取れるようになっています。今おっしゃったことはある意味では永遠のテーマであって、しかしわれわれの大学としては、日本にある他の大学とは違う意味で英語のコミュニケーション能力をきちんと付けようと考えているわけです。その一方でさっき言ったように日本人としてのアイデンティティーの問題もありますし。ですから学長自ら

が選んだ、留学中に次の本は必ず読みなさいという必読義務があります。参考までにいいますと、斎藤茂吉の「万葉集歌　上・下」それから中江兆民の「三酔人経論問答」、ルース・ベネディクトの「菊と刀」、清水幾太郎の「論文の書き方」、梅棹忠夫さんの「文明の生態史観」、私の友人だった高坂正堯さんの「文明が衰亡するとき」、これは必ず留学中にきちんと読んで、日本語でレポートを書いて下さいという課題が出ます。それからサイエンスリテラシーについては、私どもの大学は化学、化学実験，それから物理、物理実験、統計学、数学、地理学、情報科学などを取り入れて、かなり重視しています。そういう意味でカリキュラムで勝負しようと力を入れているわけです。さっき言ったような議論はすごく大事だと思いますね。
そういう理念とか概念でいくら議論してもこれは永遠の課題だと思われます。教養教育というのはいわば一般教養なのか、専門性を含む人間全体の形成の教育なのか、永遠の課題だと思います。それをまずわれわれはカリキュラムでやった。外国語も、一つの外国語を習得するということは一つの世界が、一つの新しい宇宙が心の中に形成されることですから、教養教育のもっとも重要な一環だという位置づけです。やはり十分大事なことではないか。それもやはり具体的なカリキュラムでやりましょう、というふうにしております。
最後に今日ここに来ていらっしゃる皆さんは、非常に関心もあると思うのですが、やはりこれからの大学は先ほど挙がったユニバーサルアクセスにもありましたが、その時にわれわれは日本の教育の日本の大学のトップランナーであり続けたいし、あり続けるだろうと思います。しかし、同じような教養教育を皆やったのでは意味がないんですね。まさにコンペティティブな関係の中で、個性が輝く大学というのが中教審の答申にもありましたが、ディスティンクティブ、いかにかく違うかという教養教育の中身をお互いに競い合って作っていくことの中でしかおそらく答えは出ないのではないかと思います。

司会：　どうもありがとうございました。先ほどの質問の中に大学の場を強調した、グローバルという視点もあるけれど、ユニバーサルアクセスという観点からも解釈があり得るのではないかという意見がありましたが。

内田：　一般教育の性質についての議論はそれは、基礎教育なのかという議論は定義の問題であるということと、そういう議論をすることがどれだけ生産的

かという問題がありますので、基本的にはむしろ具体的なカリキュラムや制度としてどういう風にできているかというところで議論をすることで足りるのかと思っています。日本語の問題は難しい問題でわれわれの学部でも常に、先ほど風間先生がおっしゃられたような議論というのは出ております。一つの学部で全てができるわけではないということが前提ですので、国際教養学部の場合には日本語に関しては、基礎演習は日本語と英語と両方を学生は必ず取り、そこで議論をさせているということと、中級演習も日本語でやる部分を、実は今年から作りましたので、学生によっては日本語で取ることもあると思います。上級演習は、当然海外から来た学生は、英語の代わりに日本語を学ぶということがプログラムの基本的な部分となっていますので 6 学期以降は基本的に学生は日本語と英語をある程度自由に読んだり書いたりできるようになっていると思います。上級演習の中では、その二つの言葉が使われることになると考えております。それから日本語については、早稲田大学は非常に規模の大きい大学ですので、他学部聴講か、もう一つは、そのオープン教育センターと言って、各学部が科目を出し合っていろいろな学部の学生が取れることになっておりますので、そこの科目を取っている学生がかなりおりますのでそういう形で学生には補ってもらうしかないだろうと思います。そういう意味では非常に難しいですけれども今は申し上げた程度の妥協的な中間的な解決しかお知らせできないのですが。それと同時に英語以外のもう一つの外国語も必修になっておりますので、英語と日本語というものをある程度相対化するということも学生には期待をしています。

サイエンスリテラシーですけれども、実験という点は、私どもの学部では基本的にできないので、そこは大変に問題であるということはよく分かっております。現在の大学のいろいろな条件の中ではそこは非常に弱いということは理解をしているところです。

それから、留学する学生に対して卒業後のイメージはということですが、私どもの大学ではいろんな学部は出ても基本的には就職の段階では、ほぼ同じような業種に出て行くというところもあります。国際教養だから、もちろん国際的な、国際的とは何かということもあるのですが、そういうことにウエイトはおいておりますけれども、基本的にはこれまでの他学部の卒業生とそれほど大きくは変わらないのではないかという理解をしています。

ユニバーサル化している大学をどう考えるかですが、そういう中で各大学がど

ういうポジショニングをとるかということがポイントかと思っています。学生が英語で行うということで、アジアから日本語という壁を乗り越えて来られるところに私どもの学部のポジションというものを明確にしていきたいというふうに思っています。お答えになったかどうか分かりませんが。以上です。

木畑：　最初に申しましたように東京大学の全学として教養教育リベラルアーツを位置づけるということを言っております。リベラルアーツをそれぞれの学部の教育の中でどう位置づけていくかということは、やはりそれぞれ具体的に考えていかなければいけないことだと思うのですが、実際にカリキュラムの中でどのように位置づけられるとかというところが、教える側にも学生のほうにも見えてくるというような形が必要であると思います。東京大学の場合ですと、今意識的に考えているのは、工学部の場合です。工学教育推進機構という組織が設けられて、工学部で展開されているいろいろな授業に性格付けをして、しかも相互の関連も見えるようにしています。そういう試みをやっていて、工学部で展開されている教育の中で、教養教育リベラルアーツという性格を強く持っているものにどういうものがあるのかもその中で分かる、という形になっています。これはまだ工学部だけの事例でありますが、全学的に学部教育の中でリベラルアーツを位置づけていくからには意識的に何かをしていく努力は必要であろうと思っております。

中嶋：　先ほどから申し上げておりますが、大学改革の議論のなかで組織論とか制度論はあちこちでされていますね。しかし具体的にカリキュラム改革の議論は日本全体ではあまり深まってはいない。それはおそらくカリキュラム改革というのはその後に人が控えていますよね。人事があったり講座の都合があったり、そういうことで実際になかなかできない。そうなると、日本の大学はまさに国際的な共通性とか国際的な通用性とか競争力とかほとんど持てなくなってしまうのではないかと思います。われわれの大学も新しいからできたということがあると思いますが、日本の大学全体がいかにそこを努力して詰めていくか。私どもの大学は、一つの例を挙げますと、「現代中国の映像芸術と社会」という授業科目があります。それはおそらく中国のことを考えるには政治経済が重要で、私はむしろそれを専門にやっているのですが、しかし中国の映画なんかがすごく面白いですね。そういうものを教養教育の中に入れていこうという、

非常に国際的、かつアジア的な共通性を持つカリキュラム改革を、そこまで具体的な例でぜひ皆さん方にやっていただければ、この教養教育がすごく大きな意味を持つのではないかと思います。

内田：　1番目は学部教育全体をリベラルアーツ化する方法。第2番目は、学部の中でコースを作る方法。それから 3 番目はサブメジャーというシステムを使って、メジャーとしての、法学だったら法学教育で、サブメジャーとして現代なんとか論とかですね、そういうものをやるというたぶん 3 つのやり方が具体的な手法としてはあるのだろうと思います。私自身は法律家ですのであまり抽象的な空中戦を議論してもあまり意味がないと思ってきました。具体的な制度としてどういうものが可能かというふうに考えるのが適切だろうと思っています。そういう風に考えると今申し上げたような 3 つが少なくとも頭に浮かぶシステムだろうと思います。以上です。

中嶋：　重要な指摘だと思います。国立大学に関して云うと、つまり従来は一般教養の先生と、専門教育の先生の間に研究費とか給与にも跳ね返るような差があったんですね。こういうことがあったところに一つの大きな日本の高等教育の大問題がありました。もう一つ言うと、ICU はそういう風にはなって欲しくないのですが、今皆さん、大学院教授って言うんですよ。これも国際的通用性を持たないですよ。大学院に分属化され、大学院に行ったがゆえに手当てが良くなって組織的にはみんなそっちに乗っちゃって。これも大学の非常に歪んだところですね。たとえばハーバード大学、あそこはまさに全体がアーツ＆サイエンスですね、ハーバード大学大学院教授なんて言葉を使うでしょうか？こんなみっともないことをやっていて、はたして日本の大学が、高等教育の国際性を持ちうるかどうか、私はあちこちでそのことを申し上げております。

司会：　どうもありがとうございました。それでは、これで今日は終わらないといけないのですが、やはり制度が生きてくるか否かというのは、一つは文脈の中で起こることである。ICU の卒業生、古い方に伺ったことがあるのですが、初期の ICU は実はエンサイクロペディアブリタニカに一つの項目として載っていたそうです。しかしそれから５０年経って規模も大きくなり、卒業生も遥かに多くなったはずなのに、今は、夕べ索引を見ましたが、索引にも International

Christian University は載っておりません。それは今の議論と同じだと思うのですが、一つは制度というのは文脈のなかで初めて意味を持ってきます。今日、私は4人の方々のお話を伺っていて、やはり新しい試みをする時にはいろいろな方々の意見や力が結集されているという実感を持ちました。それは現代のわれわれの大学には少し欠けていることかなと思います。国際教養というのが今日の主題でしたが、少なくとも私の理解するところ、10 年前、5 年前に比べても、今日プレゼンテーションしていただけた具体例をみますと、非常に議論のレベルが具体的、かつ意義のあるものになりつつあるのではないかという実感を持ちました。これからどうなるかはなかなか計り知れませんけれども、ぜひ何かの形で、こうしたたぐいの議論が続けられればいいなと祈念しましてこのシンポジウムの締めくくりとしたいと思います。

総合司会：　ICU の学務副学長をしている森本光生です。総合司会ということで最後に一言ご挨拶をさせていただきます。今日は、中嶋先生、ガードナー先生、木畑先生、内田先生、スティール学部長の非常に刺激的な、かつ具体的な話を聞かせていただきました。本当にありがとうございました。私は東京大学の教養学部を卒業したことがあるので少し木畑先生の先輩になって、上智大学は 26 年間勤めておりましたので 10 年以上ガードナー先生とは同僚だったのですが、大きな大学ですのでお目にかかるのは初めてです。ICU に来てからも 7 年目になります。やはりコミュニティーなんだろうと僕は聴いていて思いました。東京大学は 3 万人くらい、上智大学は 1 万人くらいで、ICU は 3000 人くらいの規模で、たぶん国際教養大学は600ー700 くらいの規模のところだと思います。ですからコミュニティーとしてどのくらいのところを狙っていくのか。しかも実際に教育をするというのは実践ですので経営的に成り立つのかというような心配もあります。そういうことも含めて与えられた環境のなかで教養教育というものを頑張っていくべきだと思います。話を聞いていて前々から思っているのですが理想的な教養教育というのは、皆様の中にそれぞれ全部違う形で存在しているのだと思います。それを今の与えられた各大学の環境のなかで実践していくので、英語で教育すべきなのか日英両語で教育すべきかということにもたぶん答えはないのだろうと思います。自分のところではこうすると決めて、それがうまく行くことを期待しつつ実践をしていく。
ICU ですと、バイリンガルということでアメリカから始まったリベラルアーツカ

レッジでもないような非常に過重な語学教育をして、ICU のリベラルアーツが成り立っています。これもアメリカの真似をすれば全部英語にしてアメリカのリベラルアーツカレッジを武蔵野に持ってくればいいのですが、そうではなくて ICU が 50 年実践してきたというのはこういうバイリンガルの教育だ。だからどれがいいのか分からないのだけれど、まだ ICU は頑張るぞという気持ちで聴かせていただきました。実は昨日 1 月 6 日、ICU の願書の受付が始まりました。銀行を通して結果がきますのでどの位応募があったのかまだ分からないのですが、中嶋先生が仰ったようにこれから学生がどっちに行くのかということを気にするという意味でもライバルです。これからも一緒に頑張ってリベラルアーツの教育を推進していきたいなと思っています。
今年初めてこういう企画をしたのですがもしご賛成がいただければまた来年度にもこういうシンポジウムを計画したいなと考えております。その節にはよろしくお願い致します。先生方ありがとうございました。ご来会の皆さまにも本当に長いことお付き合いいただきましてありがとうございました。

特色ある大学教育支援プログラム
「責任ある地球市民を育むリベラル・アーツ」

シンポジウム
「21世紀のリベラルアーツ　日本からの発信」

シンポジウム報告書

「日本でのリベラル・アーツ教育をどう広めるのか」

（2006年1月7日実施）

2006年12月9日

国際基督教大学
INTERNATIONAL CHRISTIAN UNIVERSITY

「責任ある地球市民を育むリベラル・アーツ」
国際基督教大学

シンポジウム

「日本でのリベラル・アーツ教育をどう広めるのか」

2006年1月7日(土) 13：00〜17：00
会場：国際基督教大学　ディッフェンドルファー記念館西棟　多目的ホール

挨　拶　鈴木典比古（国際基督教大学　学長）
13：00〜13：10

基調講演　**「グローカル化時代のリベラル・アーツ教育」**
13：10〜14：10
藤田英典（国際基督教大学　教育学科教授）

休　憩　（参加者による交流のためのお茶会）
14：10〜15：00

パネルディスカッション　**「日本におけるリベラル・アーツ教育の国際的な質保証」**
15：00〜17：00
中嶋嶺雄（国際教養大学　学長）
Richard A. Gardner（上智大学　比較文化学部長）
木畑洋一（東京大学　大学院総合文化研究科長・教養学部長）
内田勝一（早稲田大学　国際教養学部長）
M. William Steele（国際基督教大学　教養学部長）
司　会：立川　明（国際基督教大学　教育学科教授）

ICUは献学以来50年以上にわたりリベラル・アーツ教育の実践を行ってきました。平成15年度には文部科学省の「特色ある大学教育支援プログラム」に「責任ある地球市民を育むリベラル・アーツ」が採択され、「時代と社会の要請に応えるべく授業評価なども早くから取り入れ、学生の高い評価を得て学術基礎教育の充実を図っており、他大学に対してもモデルになる多くの内容を備えている先駆的取組である」と評価されました。

本シンポジウムでは、リベラル・アーツ教育を推進している諸大学をお招きし、日本でのリベラル・アーツ教育の優れた実践例について学び、その21世紀への対応の仕方、特に国際的な質保証をどうしたらよいか、また、日本でのリベラル・アーツをどう広めたらよいかを共に考えていきます。

国際基督教大学　学務副学長　森本光生

対象：リベラル・アーツ教育に関心のある方（通訳なし）
定員：150名
入場無料、但し参加ご希望の方は下記宛にメールまたはFAXにて**12月20日（火）**までにお申し込み下さい。
なお、定員になり次第、締め切らせて頂きますのでご了承下さい。
問い合わせ：国際基督教大学行政事務部 tel: 0422-33-3008　fax: 0422-33-3355　e-mail: gpsymposium@icu.ac.jp

ICU GP Symposium / January 2006

Nakajima:

ICU has always been a pioneer in Japan's liberal arts education. I remember getting information on the kind of liberal arts educations ICU offered when I was preparing for my university entrance exams in mid 50s. About 50 years have passed since then, and the contributions ICU has made in the field of liberal arts education can be recognized in many different ways.

Let me discuss two major aspects of liberal arts education today. Firstly, why is liberal arts education necessary and emphasized at the undergraduate level? The Japanese government, or MEXT to be more exact, is largely responsible for this. In early 90s, guidelines for establishing a university were established, subsequently dismantling liberal arts education. Tokyo University was just about the only university in Japan that had a faculty of liberal arts education. And then, emphasis was shifted to graduate school. I would say that the positive aspects of traditional higher education in Japan were destroyed. I have recently posed this question to the Central Council for Education, of which I am a member: Do Japanese graduate schools offer the kind of education worthy of a graduate school? Actually, the process of education is extremely lax at Japanese graduate schools, as compared with top graduate schools in Western countries. Higher education in Japan is at a great crisis. The more emphasis is laid on graduate schools, the more important liberal arts education will become at the undergraduate level.

I have just mentioned a general situation in liberal arts education in Japan. In our discussion today, I would like to talk with you about specific aspects of it. For example, in the case of Akita International University, we have a sense of regret and crisis over the curriculum of our liberal arts education and foreign language education. Foreign language education constitutes an important part of our liberal arts education. Therefore, we are now trying to improve the situation.

After long and careful consideration, I finally decided to add "kokusai kyoyou" to the Japanese name of our university. In English, it literally means "international liberal arts." Sophia University has the Faculty of Liberal Arts. I know "international liberal arts" sounds unnatural. However, I have my own justifications for having named our university "Kokusai Kyoyou Daigaku." In Japan, there are 89 national universities and 77 public universities, a total of 166. The name of each has a place or district name in it. In the case of our university, we decided to represent the characteristics of a new university in its name. One major characteristic of our "international liberal arts" is to enhance our students' communication skills in foreign languages. That is the first hurdle for us.

The second hurdle is basic studies, or basic education, which includes not only humanities and social science but chemistry, physics, statistics and mathematics as well. We boast of offering arts at our university. Professor Reiko Watanabe, a world-famous violinist, teaches theories of arts while playing pieces by such virtuosos as Antonio Vivaldi and Johannes Brahms. Her class has a very good atmosphere. For instance,

students, while listening to a violin performance of *The Four Seasons*, can be seen trying to analyze the notes asking such questions as "Why are there peals of thunder in the spring part?"

Art is taught by Professor Hidemichi Tanaka, vice president of International Society of Art History. He received attention from the art community through the studies that he did of Cappella Sistina in the Vatican when he was young.

The third hurdle is having our students choose between Global Studies and Global Business as their major. Actually, however, these two programs are offered as part of our liberal arts education. Our students need to study them further at the graduate school level if they really want to delve into them. We want them to get more advanced higher education, but actually it's very difficult. Some of the officials and faculty members of our university are concerned about our students' employment, and at their suggestion we have started to offer a course in career planning. Almost all of our students have done an internship. However, I believe that liberal arts education is the best qualification we can offer at our university. Our students have to overcome these three hurdles. We expect all of them to score 470 on TOEFL at the time of enrollment, study abroad for a year, and earn 30 credits at the overseas university they study at. We have established a partnership with 22 first-rate universities around the world. Next week, Nanjng University will be added to the list. When they go abroad to study, they are required to have GPA3.0 and a TOEFL score of 550(PBT). I don't think it will be possible to earn enough credits with good grades without scoring at least 550 on TOEFL. The other day we talked about a student with a score of 547, shy of three points to study abroad. A requirement is a requirement. We decided to have the student study abroad only after he gets 550 even if it means that he will be a semester behind. Eventually, about 30 students were allowed to study abroad. Our students are expected to score 600 on TOEFL at the time of graduation. Otherwise, they will not perform successfully if they get a job that requires English. Our library is open around the clock, and all freshmen are required to live in the dorm. These are not shared by conventional universities in Japan.

We have quite a few international students, who create a multi-cultural atmosphere at our campus. All of our classes are conducted in English, except for Japanese language classes for international students. All of our meetings and conferences, including the Faculty Forum, are also conducted in English. This requires a pretty high command of English on the part of faculty and staff. A sense of competition helps to raise their level of English. At our university, faculty and staff are like two wheels of a cart. One of our vice presidents is actually one of the staffers of our administration office.

I spent a great deal of time working out the curriculum of our university. I stress the importance of liberal arts education at the Central Council for Education. The whole point of liberal arts education is its curriculum. This has never been seriously discussed before. Since we offer "international liberal arts," we attach great importance to the international practicality of and transferability of our curriculum. Unless we have similar courses available at our partner universities, the credits our students earn there cannot be transferred. Being Secretary-General of UMAP (University Mobility in Asia and the Pacific), I know it is hard to get 30 credits at an overseas university and have them approved by other universities. Before any of our students goes abroad to study, I myself check the curriculum of the partner university he/she will study at and finds out if the credits he/she gets at our university are

applicable to that partner university. For example, Bergen University, a wonderful university ,offers courses in geography and history, but our university doesn't. Therefore, we set up similar courses for the benefit of the students who return to our university with credits in such courses. I think this is an extremely important task.

As I told you before, our students cannot get credits without an adequate level of competency in English. Therefore, we pay a lot of attention to teaching the language through a program called EAP(English for Academic Purposes). Our students are divided into three groups depending on their TOEFL scores. We give them further TOEFL tests after that, and then they are regrouped depending on the results of the tests. Some students are extremely good, scoring a surprising 600. Since they can skip Level 1 and 2 of EAP, they don't have to spend too much studying English only. This kind of education, offered according to the students' abilities, is not meant to be discriminatory. In fact, it helps to boost their morale.

Our university was established for the purpose of offering the kind of liberal arts education that contributes to nurturing responsible world citizens---the very goal pursued by ICU. I am proud to say that our university can offer a unique education in the rural area of Akita, which cannot be achieved in big cities like Tokyo. (Yesterday I was afraid I might be able to come here from Akita due to the heavy snowfall. We are a small university, with the full quota being 100, but we get excellent students from across the country. Ninety percent of our students come from outside of Akita Prefecture. In the second year of our university, the full quota will be raised up to 130 – 140. We accept some students in Fall Semester as well. It is important for us to have students who experienced studying abroad in their high school days. We have a special screening test in place for them. We are focused on liberal arts education. However, we are thinking of creating a professional graduate school. This is a challenge we have to tackle in two years.

Our students work really hard. With the average TOEFL score now being 530, even among freshmen, most of them will be able to study abroad in their second year. Besides, we have decided to offer a course in the Chinese language as part of East Asian Studies to address the age of globalization. Starting in April this year, we will start offering a course in Korean, and in the following year, Russian, Mongolian, and Mongolian studies.

I'm not thinking of establishing another Tokyo University of Foreign Studies in Akita, however. It is just that I'm trying to incorporate foreign language education into liberal arts education, which I was not able to accomplish when I was the president of Tokyo University of Foreign Studies. As globalization accelerates, identity as Japanese will become more important. The Bushido by Inazo Nitobe is a must read for our students. Although this book is written in English, I consider it important to consider the type of identity described in it.

It is now almost impossible to work successfully in international settings without sufficient communication skills. Once out of Japan, you have to be able to communicate in English. We try to produce individuals capable of playing important roles in the international community. Mere fluency in English is not what we aim at. It's what they say that counts. ICU was highly evaluated by society at large 50 years after it was founded. I hope the same thing will happen to our university. A survey shows that quite a few students apply to ICU and AIU at the same time.

Moderator:

Professor Steele, would you like to respond briefly to any of the four presentations you have heard?

Steele:

It seems that we all find it hard to comprehend the definition of "liberal arts" or "liberal arts education." There is no uniform interpretation of the terms. Fortunately, each university has its own very attractive internationality. The key factor is whether we have the kind of liberal arts education that appeals to high school students. How do you think they take liberal arts? Do you think they find it attractive? The true meaning of liberal arts is yet to be fully understood by high school students in general.

Another thing is why liberal arts education does not develop as much as it should. This might be an irresponsible statement, but tuition fees are often too cheap in Japan. The kind of liberal arts education we are discussing is, in a sense, a luxury education. It costs a lot of money because it involves a whole range of areas. Therefore, with the kind of tuition fees we have now, we end up offering half-hearted liberal arts education. If we want to offer the kind of liberal arts education American universities do, tuition fees must be raised three or four-fold.

Moderator:

Having heard the four speakers, I get the distinct feeling that liberal arts education in Japan has reached the level where we can discuss it in specific terms. Dr. Nakajiama pointed out that you can see what kind of issues Japan's liberation education presents once you go to a university overseas, and that we must be able to address those issues adequately.

Q & A Session

Question 1: Isn't there a difference between taking a variety of courses for general education and taking general education courses?

Question 2: What's the significance of conducting liberal arts classes in English? Also, isn't there a limit to it?

Question 3: The writing center is expected to play an important role in the future. What kind of support is available for learning English at Tokyo University? How is training in writing in English viewed there?

Nakajima:

These are all very important questions. It is often said that classes for Japanese students should be done in Japanese, not in English. This way they can understand the

classes better. We are a small, experimental university. As you may know, there are as many as 600 four-year universities in Japan. As we consider the roles Japan is expected to play in the international community in the future, we need to nurture people who are capable of effective communication in English. With this need in mind, I set about the task of establishing Akita International University. We give top priority to providing our students with good English skills. Of course, some of our courses are intended for improving their ability to express themselves in Japanese. We also have quite a few Japanese language courses for our international students. Also, we give our Japanese students courses in Japanese communication skills from the first year on. In view of the importance of raising awareness of identity as Japanese, I require that my students read some books while studying abroad, such as "the Manyoshu: Part 1 and 2" by Mokichi Saito (the earliest extant anthology of Japanese verse, which comprises some 4500 poems and was compiled in, or after AD 759), "Chrysanthemum and the Sword" by Ruth Benedict, "How to Write a Thesis" by Ikutaro Shimizu and others. I tell them to write a report on these books after reading them carefully. They have to do this while studying abroad. As for science literacy, we lay great emphasis on chemistry, chemical experiments, physics, physical experiments, statistics, mathematics, geography, and information science. We try to set ourselves apart from other universities through this kind of curriculum. It seems to me that we can never anticipate the end to our discussion on liberal arts education if we only talk about it in terms of its abstract concepts. It's an eternal question whether liberal arts education can be taken as part of general education or contributes to shaping people's character or their specialty. We do this through our curriculum at our university. Learning a foreign language leads to a whole new world, and we consider this activity a vital aspect of liberal arts education. That's why we have made foreign language education part of our curriculum.

Finally, this is something that we are all concerned about. It's related to universal access which was mentioned earlier. All of us here today want to continue to be leaders in universal education in Japan. However, each of us should try to offer something different. At the Central Council for Education, creating universities with distinctive features in a competitive environment was proposed. I think it's very important for us to enhance the quality of our liberal arts education through a competitive-cooperative relationship.

Nakajima:

As I have mentioned already, there has been a lot of discussion on university organization and system. However, there has been very little discussion on curriculum reforms in Japan. This is probably because curriculum reforms involve changing personnel and rescheduling courses. This makes Japanese universities reluctant to reform their curricula. I'm afraid this sort of thing prevents them from reaching international standards or gaining a competitive edge. You might say that we have been able to accomplish this because we are a brand-new institution. How Japanese universities can achieve curriculum reform is one of the greatest challenges they have

to address. At our university, we have a course called "Chinese Cinema and Society." It's important to learn about China's politics and economy to understand China. It's my area of specialization. However, I find it very interesting to study about Chinese movies. I decided to incorporate it into our liberal arts education. I believe that liberal arts education will take on great significance if it can include courses with international and Asiatic relevance.

Uchida:

One way would be to make the education of an entire department liberal arts-focused. A second way would be to create liberal arts courses within a department A third way would be to create what might be called a sub-major system. For example, law could be studied as a major in law education, and in addition to that, "Modern XXXX" could be studied as a sub-major. Of the three methods, the third one would be the most feasible. As a lawyer, I have always thought that there is not much meaning in just tossing abstract theories around. We need to consider how we can come up with a specific, practical system for liberal arts education. The above three ways come to mind

Nakajima:

Professor Uchida pointed out something very important. As far as national universities are concerned, there has been a gap in research funds and salaries between liberal arts education faculty and specialized education faculty. This has been one of the greatest problems inherent in higher education in Japan. Also, I hope this is not true of ICU, but now we have the so-called graduate school professors. Again, this is not internationally adaptable. After they start teaching at the graduate school of their university, they find that they get better paid there and as a result they transfer to the graduate school. Harvard University is devoted to arts and science. Is "Harvard University Graduate School Professor" ever used there? I cannot help but wonder if Japanese universities will be internationally sustainable

Moderator:

I heard from someone who graduated from ICU a long time ago that ICU used to be an entry in Encyclopedia Britanica. Fifty years have passed since then, and a larger number of people have graduated from ICU. ICU is no longer listed in it. As I heard the four speakers today, I came away feeling that when something new is being tried, many people's views and opinions are expressed, enabling the idea to gain momentum. I'm afraid this is missing in Japanese universities now. The four speakers presented specific and meaningful ideas on international liberal arts education. It was not the case with symposiums on the same subject 5 to 10 years ago. Let me bring this event to a close by hoping that we have more of these discussions.